

5. 京田辺市出土陶棺および関連資料

小林 楓

1. はじめに

京都府立大学考古学研究室では、2019年度より京田辺市史編さん事業の一環として、京田辺市市内出土考古資料の再検討をおこなっている。本稿では、昨年度の堀切古墳群と宮ノ口古墳群の再検討の延長として、YM氏（故人）の遺族が京田辺市教育委員会に寄贈した堀切古墳群出土「須恵質陶棺片」と、宮ノ口古墳群から出土した陶棺片について報告する。

2. 堀切5号墳横穴付近出土「陶棺片」

(1) 概要

YM氏旧蔵資料の中に「堀切5号墳横穴付近／はにわ片／陶棺片／1969.1.20」と記載された紙片と3点の遺物が確認された。1969年の発掘調査においては、堀切5号横穴の掘削中に、後世の溝から「須恵質陶棺片」（高橋1969）が出土している。

1969年の報告では、5号横穴の掘削の際に「横穴の上を斜めに横切って走る後世の溝」から「須恵質陶棺片」が発見されており、5号横穴に埋葬されたものではないため、5号横穴の上方にあり、円筒埴輪列をめぐる4号墳からの流入と考えられた。しかし、その後1989年の発掘調査で4号墳の隣に新たに7号墳が確認され、周溝からは円筒埴輪・馬形埴輪・人物埴輪や須恵器大型器台とともに「鞍形埴輪片」「鞍状遺物」「鞍状埴輪」（すべて同一の遺物を指すと思われる）が出土した。これは「先の調査で、横穴墓発掘中に出土した須恵質の陶棺片と報告されているものと同質」と記述され、全体が復元できないものの「鞍・盾・陶棺」が想定されている。1989年の調査では4号墳の裾部でも発掘調査をおこない、7号墳と接する周溝内からは埴輪片もみられたが、これらは7号墳の埴輪列に伴うものであり、4号墳の外表面施設は確認されなかった（田辺町教育委員会1989）。4・7号墳と5号横穴の位置関係を踏まえると、本資料は5号横穴の直上にある7号墳から流入した可能性が高い。なお、1969年報告では「須恵質陶棺片」は図化されていないため、本資料と同一とは言いきれないが、吉村氏が1989年の発掘調査報告にも関わっていることを考慮すると、本資料を1969年に出土した「須恵質の陶棺片」の一部と考えていた可能性は高い。

(2) 遺物の検討

1は縦11.5cm、横9.6cm、厚さ1.9cmを測る。色調は灰色を呈する。端部をもつ板状の面から突帯が伸びたような形で、突帯は端部と反対方向に屈曲する。2は縦11.8cm、横9.3cm、厚さ2.5cmを測る。色調は灰色を呈する。端面を2方向にもつため、矩形の端部と考えられる。端部には一部に工具をこすったような痕跡が残る。3は縦15.5cm、横10.8cm、厚さ1.5cmを測る。色調は灰色を呈する。表面がわずかに張ったような板状を呈し、内面を横方向にナデ調



図1 堀切古墳群分布図 (田辺町教育委員会 1989 に加筆)

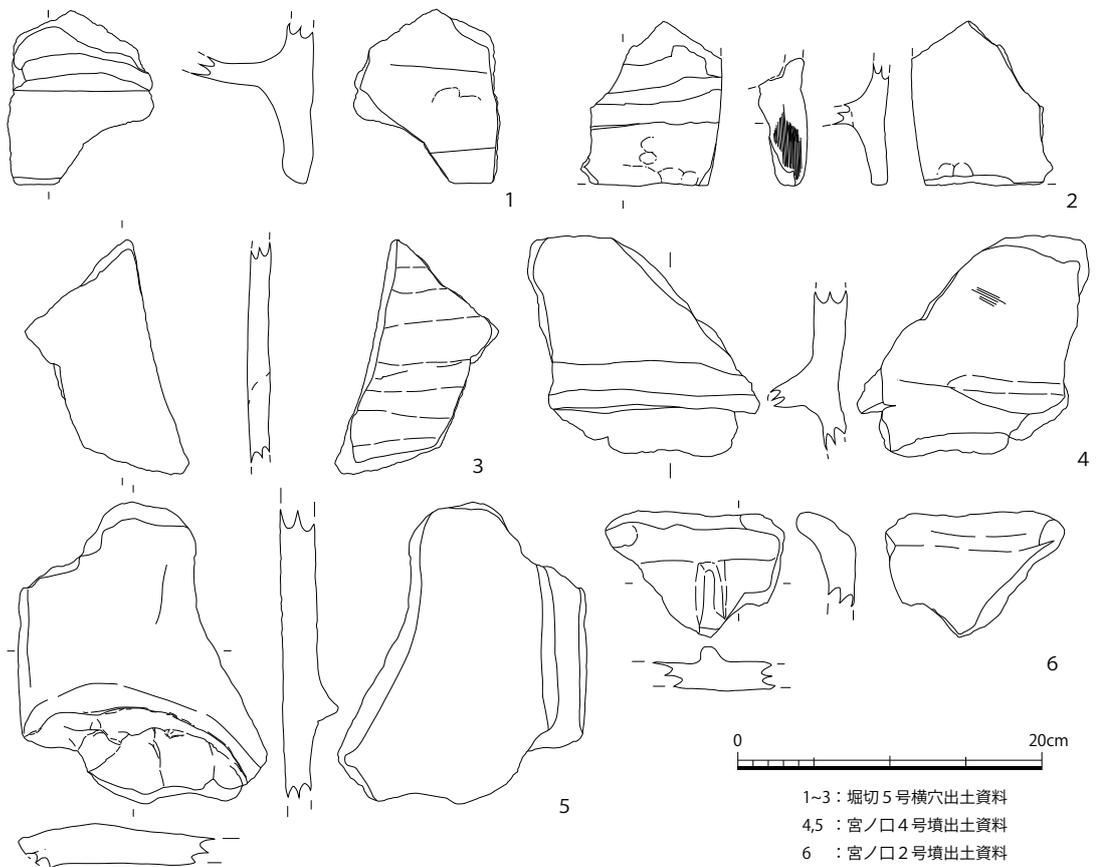


図2 陶棺および関連遺物実測図 (S=1/5)

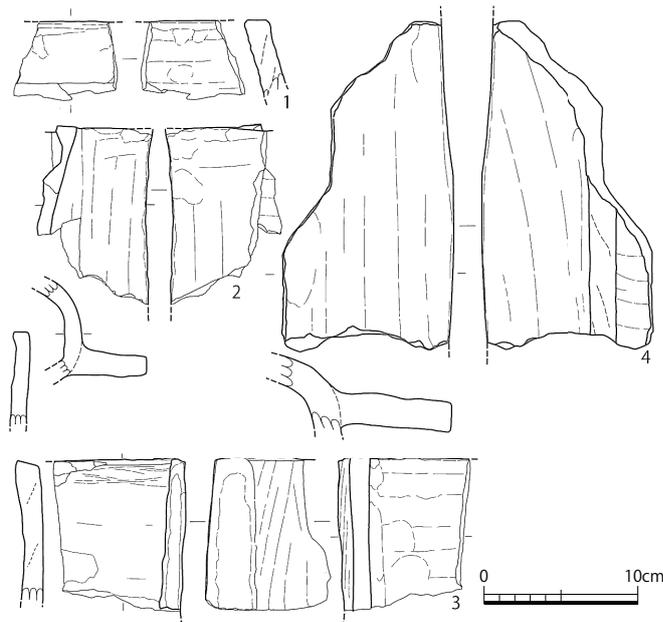


図3 堀切7号墳出土「鞍状埴輪」実測図 (S=1/5)
(辻川 2021 より一部引用・加筆)

整を施す。3点ともに須恵質焼成で、同一個体を形成すると思われる。主にナデ・オサエで調整されている。

山城地域の陶棺を集成した木村氏はこの遺物について、陶棺片ではなく盾形埴輪であると言及しており（木村 1979）、今回の報告に際しても、陶棺と判断できる部位をみとめられなかった。

堀切7号墳出土の「鞍形埴輪片」を実見したところ、接合はしないものの、一部に板状に突帯をもつという特徴的な形態が類似したものを確認した（図3-2～4）。なお、7号墳出土陶棺の検討をおこなった辻川氏は鱗付楕円筒形土

製品に比定している（辻川 2021）。以上から出土状況を踏まえると、同一個体の可能性がある。

3. 宮ノ口古墳群出土資料

(1) 概要

宮ノ口古墳群は京田辺市大字宮津に位置する、古墳時代後期の古墳群である。これまでに2次にわたり発掘調査がおこなわれ、2・4号墳は横穴式石室をもつ円墳で、2号墳では釘付木棺を使用していた可能性が指摘されている（岡田・池田 2021）。1994・1995年に2・4号墳を発掘調査した際に出土した陶棺片を紹介する。

2号墳出土の陶棺片は表土直下から土師皿とともに出土したが、上方からの流入土とみられており、2号墳にともなうものではない（田辺町教育委員会 1996）。4号墳出土の陶棺片は流入した土の最下層から出土しており、4号墳にともなうものではない（田辺町教育委員会 1995）。本稿においては、昨年刊行のフィールド集報に写真を掲載した「2号墳出土陶棺片」（図2-6）と、1995年の報告で図化されていない「4号墳出土陶棺片」2点（図2-4・5）を紹介する。

(2) 遺物の検討

6は縦8.3cm、横11.8cm、厚さ1.7cmを測る。色調は淡黄色を呈し、土師質焼成である。端部が手前になだらかに返るような形状で、端部と垂直方向に低い凸帯がのびる。摩滅していて調整は不明瞭であるが、ハケメなどは認められず、ナデ調整と思われる。端部が蓋身の合わせ目部分とも考えている。垂直な面が存在せず、重い蓋を支える支点としては不十分と判断し、棺蓋または棺身を分割した際のつなぎ目に相当すると考えている。5は縦20cm、横11.8cm、厚さ2.2cmを測る。色調は黄橙～浅黄橙を呈し、土師質焼成である。先端がつまみ出され

たような低い突帯が円形にめぐり、全体的に厚く扁平である。凸帯の下部は粘土の接合痕が明瞭に残り、やや粗雑な印象をうける。摩滅により調整は不明だが、ナデ調整と思われる。4は縦14.9cm、横15.4cm、厚さ2cmを測る。色調は明黄褐～黄橙色を呈し、土師質焼成である。凸帯は水平方向に一直線に伸びており、あまり高くない。摩滅により調整は不明だが、裏面の一部にハケメが残る。既報告の1点に比べると凸帯が明確に作り出されているので、棺身の受部近くにある突出部であると想定できる。

3点ともに土師質を呈し、凸帯の製作方法に大きな違いはみられず、同一個体と考えられる。2・4号墳は近接して存在するため、両者に属さない古墳からの出土を考えると、さらに上方に別の古墳の存在が想定される。

4. おわりに

今回は堀切古墳群出土「陶棺片」3点と宮ノ口古墳群出土陶棺片3点を報告した。事実報告に留まったが、堀切古墳群出土の「陶棺片」は長らく行方が分からなくなっていた資料であり、今後の活用に供することができれば幸いである。

参考文献

- 岡田大雄・池田野々花 2021 「京田辺市宮ノ口古墳群の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号
- 岡田大雄・上村緑 2021 「京田辺市堀切古墳群の再検討（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号
- 加藤雅士ほか 2018 「松井横穴群第1～4次」『京都府遺跡調査報告集』第171冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 木村泰彦 1979 「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所
- 京田辺市教育委員会 2006 『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ—薪堀切谷・里ノ内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—』（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第36集）
- 京田辺市教育委員会 2010 『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ—薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ—』（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第37集）
- 高橋美久二 1969 「堀切横穴発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1969）』京都府教育委員会
- 田辺町教育委員会 1989 『堀切古墳群調査報告書』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集）
- 田辺町教育委員会 1995 『宮ノ口4号墳発掘調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第20集）
- 田辺町教育委員会 1996 『宮ノ口2号墳発掘調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第21集）
- 辻川哲朗 2021 「山城・堀切7号墳出土「鞍状埴輪」の再検討」『滋賀県立大学考古学研究室論集Ⅰ 考古学研究室25周年・中井均先生退職記念』滋賀県立大学考古学研究室論集刊行会